Prof. A. Hill Returns

Prof.A.Hillの帰還とロジ裏生活

Season 2, Episode 3

こんなにたくさんあると少し怖い。

毎回毎回ようもこんなちゃらんぽらんな文章書いて、ちったあ皆様のお役に立つこと書いたらどうやねん、と天から声（ガネーシャ？）がありそうだ。しかし、大変申し訳無いことであるが、実は一連の文章には自分で課した鉄の掟があるのでそうもいかないのだ。掟とは、1．役に立つことは書かない、2．教訓は垂れない、3．わかったようなことをしたり顔でいわない、の「非書く3原則」（？）である。私はちゃんとポリシーを持って文章を書いているのだ！と力んでどうする、全くのへたれポリシーだが、世の中「役に立つ・教訓」系の情報が氾濫しているし（ほんまに役に立つんかぁ）、まあね、たまにはね、こういう徹底して役に立たない情報もいいでしょう。私の嫌いなもの（断っておくが、「まんじゅう怖い」のほうじゃなくて、ほんとに嫌いなもの）に、「したり顔でわかったようなことを言うニュースキャスター」というのがあって、「犯人だけの問題じゃないんです、我々社会が考えていかなくてはいけない問題です」とか言って、言ったことに自分で酔ってる輩、ああいうのが大嫌いだ。言葉に中身無いやん。おまえが社会の代表か？おまえは考えてんのか？
YUIも歌ってる、♪わかったようにアタシのこと話すのはやめてよ…。さらにはこうも。♪尊敬できない大人のアドバイス、あたしはあなたみたいにはなりたくないと思った♪（How crazy,作詞作曲YUI）。うーむ、YUIがうちの院生じゃなくてよかった…
ともかく、それでは今回もしょもないこと全開ということで、ヨロシク（エーちゃんの口調で）。

雑誌などの著者プロフィールに、趣味を書かされることがある。あれって何のためだろうか。学問以外の情報があると著者に親近感を抱くことができるからか。しかし、皆さんスペースのこともあって読書とか音楽鑑賞とか食べ歩きとか書くくらいで、それを知ってもあまり意味がないように思う。ええーっ、あの先生の趣味がどくしょ〜〜！？と驚くことがあるとしたら、既にその先生自体のキャラが異彩を放っているってことで、そんなこと滅多にないし。逆立ちしてかき氷を食べるのが趣味とか、異性の下着を集めるのが趣味とか書いてあったら相当情報量大だが（共同研究を考え直した方が良いなどの判断材料になる）、そういうのも見たことがない。実際には、素晴らしい趣味を持った研究者はたくさんいる。私が編集長をしていたメントラ・ニュースレターに連載のanother side of investigatorを読んで頂ければ、一流の研究者は一流の趣味を持っているということがよくわかる。皆さん活き活きと趣味のことを書かれています。1行じゃ伝えられないから、プロフィールにはとりあえず読書とか書いてしまうのかも知れない。

じゃあ、お前はどうなんだと言われれば、私はもちろんお察しの通り趣味が山ほどある。正直言って、教授なんかしている暇は無い。チェロ演奏はプロ並みだし、杉本博司のオリジナルプリントのコレクションは相当のものだし、自家用ジェットの操縦も好きだし、後はムートンの全ラベルと李朝青磁収集…　…　…　な訳がない。あ、ちなみに、アメリカの某教授（女性）は本当に学会に飛行機を自分で飛ばしてきたそうだ。スケールがちゃうなあ。私にはせいぜい三輪車で学会に現れて話題になることくらいしかできない（言っておきますが、本当にはしたことないですよ。断っておかないとまた信じる人が出てくるので念のため）。私の本当の趣味、まずは各種の「マイベストテン」だ。例えばアナウンサーのネクタイ。結構色々で、趣味の悪いのが多いし、締め方が変だったり。かなり前から（私の中で）不動のダントツ1位をキープしているのが、野村正育アナ（NHK）。この写真じゃ残念ながらよくわからないけれど、まずネクタイの柄が派手ではないが大変センスが良く、そして何よりノット（結び目）のつくりかたが100点。ディンプル（ノットの下に作るくぼみ）が美しい！私自身はネクタイの締め方が下手なのでほれぼれしてしまう。

野村アナ

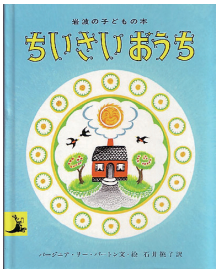
藪中さん
外務次官に出世されました。

Prof.A.Hillの帰還とロジ裏生活

野村選手、いつ見てもパーフェクト。シャツの襟の角度も真面目で真っ当、色は絶対白（微妙に柄が入ることはある）。いいですねえ、こだわりが相当ある。ハンサムってことで女性に人気あるらしいが、こだわりの完璧ネクタイえくぼにまで気付いている人は少なかろう。でも見てる者は見てるぞ、ガンバレ野村！皆さん、是非ニュース7（土日）でチェックを。顔はちょっとロジ計画班の清水さんに似ている。類似のマイベストテンでは、官僚ベストドレッサーというのもあります。一位は外務省の藪中さん。北朝鮮関連でいっとき良くテレビに映っていた人である。クレリックシャツ着たりして官僚にしてはお洒落。東大じゃなくて阪大出身。先輩だ。えこひいきで高得点。後は、お洒落ヤクザベストテンもあるけど、やばいのでやめておこう…　しかし、私が報道の中身を見ずどうでもいいところばかり見ているのが如実にわかる。こういう我がトリビアリズムは、度し難いものがあるけれど、でもまあいいや。（だから、いっこうに人間性が向上せえへんねんがな、とまた像神の声。啓発本は嫌いなんでガネーシャ読んでないですが）

註：トリビアリズム【trivialism】　事象の本質を探求するよりは、末梢的な事柄に拘泥する態度。瑣末主義。

続いて、よそのお宅の玄関周りベストテン。ジョギングや散歩しながら鑑賞・批評する。お金がかかっていれば良いと言うものでは無く、少し古びて、植物が良い感じで馴染んでいて、シックな小さめの玄関周りがベスト。和洋問わず。玄関ってその家の顔だから、玄関周りを見れば、素直だとか軽薄とか家の性格（？）が分かるし、住んでいるのが慎ましくも健やかに暮らしている一家なのか呪われた一家なのかも分かるのだ。欧米では、ほれぼれするような玄関によく出会うけれど、日本じゃ希。だいたいドアのデザインがイマイチなのが多い。ドアって予想以上に値が張るのでびっくりするのに、なんであんなお粗末なデザインが多いんだろう。古いもののほうがまし。この趣味は、あまり熱心にチェックを入れていると犬に吠えられたり警察を呼ばれたりするので要注意（断っておきますが、前者の経験はあっても後者はありません。念のため）。



玄関が顔と言えばこれ。バージニア・リー・バートンの絵本は、大好きだった。

街角の苔ベストテン。３丁目のどぶの苔が見事とか。これは結構ファン多いですよね。苔好きの女性（鉄女ならぬ苔女？妖怪みたいだな…）が書いた本があるから女性ファンも増えているはず。皆でぞろぞろよその家の前のどぶで品評会をしたら面白いかも。一時期、家の中と庭で苔を大々的に飼おうともしたが、うまくいかず。苔は難しい。苔寺はもう行ったので、比叡山延暦寺の常行堂に苔を見に行くのが目下の夢。苔ってあのナメラカさが溜まらない。苔で覆われたデスクで仕事がしたい（仕事がしたくないってことかな…）。飛行機から雲の写真を撮るのも趣味。この話は、以前メントラニュースレターにも書いた。出張のたびに一杯撮るから相当蓄積している。でも飽きない。両親に海外に行ったときの写真を見せろと言われて見せたら、半分以上同じ写真じゃないかと言われた。全部違う雲の写真なんだけど…　これも同好の士が居て、知り合いのニューヨークの女性教授も飛行機で雲の写真を撮ることが、ある時に判明し、意気投合した。

延暦寺常行堂

釧路～伊丹間　2010夏

蒐集癖方面ならば、李朝青磁やムートンロートシルトではなく靴下。断っておくが、女性のじゃなくて自分が履く男性用靴下です。それもスミスという人が作る靴下専門。昔から毎年ものすごくたんさん色々な柄が出るので、主に花柄を集中的に蒐集している。ポップでシックで、とても楽しい柄だ。最近は男性の花柄シャツも有りだけど、それは若い奴であって、私が花柄のスーツ着ていたらきっと教授会の部屋に入れて貰えない。でも靴下ならあんまり

Prof.A.Hillの帰還とロジ裏生活

靴下コレクションの一部。左のような花柄が多いが、右のような面白いのもあります。

見えないから許される。え、許されない？えっえっえええ？えーやん、そのくらい。元祖肉食系女子（私と同い年だが）の作家の山田詠美も、この靴下を男の子にプレゼントするらしいし。あっ、男の子か…おっさんにはやらんのか…

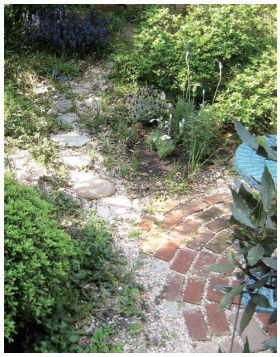
最も趣味らしい趣味は、庭いじりであろう。ガーデニングじゃなくて庭いじり。パンジーやバラは植えなくて、ギボウシとかクリスマスローズとかフウチソウとか日陰のしぶーい植物に偏向しているので、庭いじりが名称として相応しい。子供の頃地面に這いつくばって虫や雑草を相手に遊ぶのが好きで、その性向が今頃になって蘇ったのか、土まみれになるのがとても楽しい。最近は庭タイムが取れなくてフラストレーションが溜まっている。庭は、ここにはこれを植えてあっちは地面に煉瓦をはってとか自分であれこれデザインを考え実行することと、植物は植物で勝手にどんどん庭を自然の法則に従ってデザインしていくことのせめぎ合いみたいなものが面白い。広大な庭だと収拾がつかなくなるけれど、首を振らなくても全体が見渡せる我が猫額庭（しかも野良猫が自分の庭だと思っていて、毎日来て堂々とオシッコをしていく）なら、そういうことが楽しめる。とはいえ、うちの庭で最強を誇るドクダミとの闘いは熾烈だ（ドクダミを買ってきてわざわざ植える人もいるのになあ）。一方、10年以上雑草だと思っていたものの根本に、売っているのと同じミョウガ状物体を見つけ食べたらまさにミョウガでとても美味しくて、何だかとても得したような（今まで気付かなくて損していたとも言えるが）小確幸も味わえるのは庭ならではである。庭で植物を植えること以上に力を注ぐのが、ラティスをフェンスに付けたり、煉瓦や自然石や砂利を地面に敷いたり、石垣を作ったりの私が呼ぶところの土木作業である（お金が無いので全部自分でするしかない）。煉瓦などはホームセンターで購入できるが、石垣や飛び石にする自然石を手に入れるのが難しい。通勤途中でも良い石が落ちていないか、きょろきょろしているのだが、郊外とはいえ住宅街でおいそれと大きな石は転がっていない。国内あるいは海外出張で移動中に山間などを通過し、人気のない大きな河の河原に良い形の石が無造作にごろごろしているのを目撃したりすると、あ、あ、あ、もったいないと、降りて拾いたくて居ても立ってもいられなくなる（仮に降りて拾ってもどうやって持って帰るねん）。とうとう、家の裏に小さな川原のある知り合いが同情して呼んでくれて、思う存分採取できたが筋肉痛になった。しかも抱えることが出来たのはかなり小さい石のみで、軟弱な造園マニアである。

我が家の庭の全景（嘘です。これはベルサイユ宮殿の庭）

基本的に和式もとい和風好き

日曜日に少しずつ煉瓦を敷く

ギボウシ（欧米じゃホスタ）とクリスマスローズ



ポール・スミザーという園芸家の考え方やセンスが好み。宝塚に彼の作ったイングリッシュガーデンがあるが、自然な感じが素晴らしい。お薦め。

問題の自生するミョウガ

最近はまっているのが象虫。象虫を採集するのではなくて、象虫の写真集を鑑賞するのだ。象虫の大きさは数ミリで、接写すると一部にしかピントが合わないが、小檜山賢二さんという電気工学者で慶

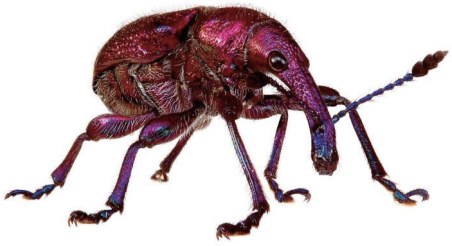
Prof.A.Hillの帰還とロジ裏生活

応の名誉教授の方が、マイクロフォトコラージュという手法を編み出して全てにピントが合った写真を作って（デジタル合成写真ですね）編んだ写真集である。これがCGなど遠く及ばないど迫力。美しい…　そもそも象虫は種類が多くて、色も形も並外れてダイバースしている。それがおもいっきりくっきり細部まで見えて、独特のめくるめく美の世界が展開されている。宝石みたいな表皮の奴もいるし、もう工芸品の域だが、人間のアイデアなど遠く及ばないデザインで、美術史上に比較できるものがない独特の領域なのだ。巨大に感じられるので、スターウオーズに出てくる地上用戦闘マシーンも思い出す。HPから写真を借用してここにも載せるが、これは大型の写真集で見るべき。うちに来た客に見せると、うぎゃあと悲鳴をあげる人とほほうと見入る人に分かれるのが面白い。前者はやはり女性が多いですね。慌てて目をそらさず、よーく見たら表面がひとつひとつ色の違う粒状のものでびっしり覆われてる奴もいることに気付くのに、もったいない。気付いたら気絶するかもしれないけれど。

私の趣味はまだまだあるのだが、雑誌の著者紹介でもこれだけ書かかせてもらえれば、私という人物像が浮かび上がってくるのではなかろうか。え？支離滅裂で意味不明としかいいようがない？　そういうときは、複雑で奥深い人間性と言うように。断っておくが（断ってばかりだな…。もう５回断った）私はまともな読書も音楽鑑賞もちゃんとするし、美術館も大好きだし、映画も好きだし、飲むのも食べるのも好きだし、絵を描くし、そういう人並みな趣味もあるけれど阪大のN先生のようにものすごい読書量と深い洞察があるとか、名大のE先生のようにセネガル音楽については日本では右に出る者がいないというような域ではなく、まあ朝ご飯は食べてますと言うのと同程度なので、奥ゆかしい人間ゆえに特に述べなかっただけなのだ（自分の靴下の写真を出しておいてどこが奥ゆかしいのか、などと詰問しないこと）。

追記：

冒頭に書いたように、人の役には立たぬという揺るぎない信念（？）を持つA.Hillであるが、一度だけ心がぐらついたことがある。私が人生のmentorと慕うN先生の奥様が病床で、私の駄文を読んで笑って下さったと聞いたときである。一瞬、奥様の気を紛らせることが少しの間にしろできた、役に立ったのではと考えてしまった。すぐに我に返り、妙な邪念を持ってはいけないと自分を戒めたのだが。そもそも役に立たないことが書いてあったから、笑って頂けたのだ。

その奥様が亡くなられた。我々が属するこの世界はハードボイルドだ。誰かが役に立つことを書こうが、役に立たないことを書こうが。いずれにしても。

象虫：マイクロプレゼンス―小檜山賢二写真集
小檜山　賢二（著）　出版芸術社